

〈原著論文〉

出生順位が観衆効果に及ぼす影響

筒井清次郎*・神彩葉**

目的

山本(1998)は、観衆の質(友人、他人)と性別が運動成績に及ぼす影響を検討している。片手2ボールジャグリングを課題として、観衆がいない条件、観衆が友人である条件、観衆が他人である条件の3条件で課題を遂行させた。その結果、学習初期の課題であるため、男女ともに観衆のいる条件の方が観衆のいない条件よりも成績低下を示した。さらに、男子においては、観衆が他人の場合には友人の場合よりも低下が大きかったのに対し、女子においては、逆に、観衆が友人の場合には他人の場合よりも低下が大きかったという性別と観衆の質の交互作用が見られた。これより、性別と観衆の質が運動成績に影響を及ぼすことが明らかにされた。

このように、観衆の質に関する研究は見られるが、参加者自身の質に関する研究は見られなかった。そこで、きょうだい構成に関する論文に興味を持った。きょうだい(兄、姉、弟、妹全ての組み合わせをあらわすためにひらがな表記とする)は、家族という緊密な関係の中で互いを意識し、様々なやりとりをしながら影響を受けたり与えたりする。ある時には、お互いに助け合い、その良さを感じつつも、存在によって自分の欲求が阻害されることや、反目し合うこともある。きょうだい構成は、個人の適応やその行動様式と密接に関わっている。

出生順位と性格について、浜ら(1987)は、長子の特徴として、他人に迷惑をかけないように行動していることを挙げている。末っ子の特徴として、自分の新しい考えを打ち出すことには抵抗があるが、人目などには抵抗があるわけでは無いので、注目を浴びることには抵抗を感じにくいことを挙げている。このことから、きょうだい構成が、人前で運動を遂行することに影響している可能性は高いと考えられる。さらに、今永(2011)は、末子の無理にでも自分の考えを通そうとする性格特性は、積極的、自己実現意欲につながり、末子のはきはきしてほがらかなところが、アスリート向きの性格特性である活動的、外向的な性格に通じている。それに比べて、長子はあまりアスリート向きの性格ではないと報告している。ところが、太田(2012)は、出生順位による性格特性は必ずしも当てはまるわけではないことを報告している。このように、必ずしも研究結果が一致しておらず、今後の検討の必要性が示唆される。

出生順位と運動意欲を検討した奥田ら(2001)は、第2子は第1子よりも、運動意欲は有意に高いが、失敗回避動機には差が見られなかったと報告している。

浅川(2007)は、きょうだい構成が幼児期における運動能力及び心理的特性に及ぼす影響に関して検討している。きょうだい構成において、年上の兄がいることは、年下の子の運動能力及び運動有能感に影響を与える可能性が示唆されたと報告している。

したがって、本研究では、参加者の出生順位と性別に、観衆効果が運動成績に及ぼす影響を検討することを目的とする。

* 東海学園大学スポーツ健康科学部

** 西尾市立吉田小学校

方法

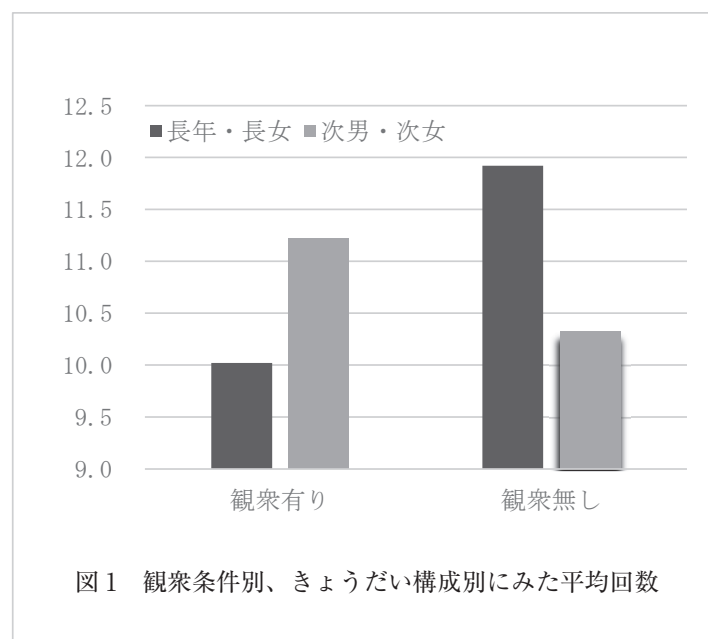
1. 参加者 2人きょうだいである、男子大学生38名、女子大学生39名の合計77名。
2. 実験手続き 参加者にお手玉2個を渡し、2個同時に片手に入ることのないように、交互に片手で投げ上げることを習得してもらう。連続して10回成功できるようになってから、観衆がいない条件と観衆がいる条件の2条件それぞれで2回ずつ遂行させた。観衆がいる条件では、参加者には面識のない観衆5名が見ている前で、遂行させた。各条件の平均回数を従属変数とした。
3. 分析方法 性別(男、女)×出生順位(年上、年下)×観衆条件(有り、無し)の3要因のうち最後だけが繰り返し要因となる3要因分散分析を用いた。山本(1998)の研究により、性別と観衆の質の交互作用が認められているので本研究においても性別の要因を加えた。なお、実験研究において、4以上の要因を考慮することは実験計画が複雑になり、解釈が非常に難しくなるため、本研究ではこれ以外の要因は加えなかった。統計的有意水準は5%未満とした。

結果

本課題は参加者にとって新規な課題であり、学習初期にはスポーツ経験による差が見られなかった。もし、差が見られる参加者がいた場合には、除外する予定であったが、その必要はなかった。

性別(男、女)×出生順位(年上、年下)×観衆条件(有り、無し)の3要因のうち最後だけが繰り返し要因となる3要因分散分析を行った。その結果、性別($F(1,71)=1.285, n.s.$)、出生順位($F(1,71)=0.832, n.s.$)、観衆条件($F(1,73)=0.022, n.s.$)のいずれも主効果も有意でなかった。出生順位×観衆条件($F(1,73)=4.041, P<0.05$)の交互作用が有意であった。性別×観衆条件($F(1,73)=0.863, n.s.$)、性別×出生順位($F(1,73)=0.874, n.s.$)、性別×出生順位×観衆条件($F(1,73)=0.978, n.s.$)の交互作用は有意でなかった。出生順位と観衆条件の交互作用が有意だったので、単純主効果検定を行った。しかし、出生順位別にみた観衆有り条件・観衆無し条件に差はみられなかった。有意水準には達しなかったものの、観衆有り条件では、次男・次女の方が長男・長女よりも遂行回数が多く、観衆無し条件では、長男・長女の方が次男・次女よりも遂行回数が多かった。

図1は、きょうだい構成別にみた観衆有り条件と観衆無し条件の平均回数を示したものである。



考察

浜ら（1987）は、出生順位と性格について、長男・長女の特徴として他人に迷惑をかけないように行動していることを挙げている。したがって、長男・長女は知らず知らずのうちに周りのことを考えて行動しているため、観衆有りの状況では周囲の目を気にしすぎて、思い通りの運動成績を示せなかったと考えられる。

これに対して、次男・次女の特徴として人目などにそれほど抵抗が無いことを挙げている。したがって、次男・次女は、人目を気にせずに行動することができ、自己アピールの場を求めることが多いため、観衆有りの状況の方が高い運動成績を示したと考えられる。

これらの結果は、小中学校における授業等で考慮すべき点と考えられる。体育等では、生徒の前で動きを見せる場面もあるが、長男・長女の場合には、本来の動きを再生することができず、人前で見本を見させるはずが、逆に、上手くいかず、恥ずかしい体験に繋がることもあり得るので、十分に配慮する必要が考えられる。そういう失敗経験がきっかけになって、自信を喪失し、その運動を避けることに繋がる可能性もある。体育指導においては、十分配慮する必要があると思われる。

引用文献

- 1) 浅川大輔 きょうだい構成が幼児期における運動能力および心理的特性に与える影響について 順天堂大学修士論文 2008年
- 2) 浜治世・三根久代・三根浩・松山義則 きょうだい構成および出生順位と人格変数との関係 -MMPIを用いて- 心理学研究 58巻2号 p.105-108 1987年
- 3) 今永亜由美 出生順位が競技パフォーマンスに及ぼす影響 早稲田大学スポーツ科学部卒業論文 2011年
- 4) 奥田援史・堀井大 出生順, きょうだい構成及びきょうだい関係と運動意欲との関連 身体運動文化研究 8巻1号 p.17-26, 2001年
- 5) 太田捺美 スポーツにおける出生順位による性格特性に関する研究:びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部卒業研究 2012年
- 6) 山本祐希 行為者の性別にみた観衆の存在及び観衆の質が運動パフォーマンスに及ぼす影響について 愛知教育大学保健体育卒業論文 1999年